
HRUNNAD ~ もう一つの世界 ハルヒ編 ~

brades

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

HRUNNAD ヲもう一つの世界 ハルヒ編

【Nコード】

N8305M

【作者名】

brades

【あらすじ】

淡々と降りしきる雨の中、俺は無人の教室に呼び出された。普通だったら何かあるに違いないと疑念の耳をピンと立てる俺であったが、何であろう、あの人の頼みなんだ。
教室の扉を開けた先には・・・

1 序章（前書き）

これは、とあるアニメを参考にして書いた、涼宮ハルヒの憂鬱の二次創作小説になります。

作者自身はこの作品に感動し、どうしても書きたくなったことからmixiにて日記公開をさせていただきました。

まだまだ新米ですので、文章構成などに不備などあるかと思いますが、暖かい目で見えて頂けると光栄です。

1 序章

淡々と降りしきる雨の中、俺は無人の教室に呼び出された。

普通だったら何かあるに違いないと疑念の耳をピンと立てる俺であったが、何であろう、朝比奈さんの頼みだというのだ。

ここで退いては男が廃るというものさ。

「どうしました、朝比奈さん？何か俺に用ですか？」

朝比奈さんは、少し暗い顔をして、少しづつ俺に近づいてきた。・

・何かまずい問題でもあったのだろうか？

そして彼女は俺の前で止まり、いつもとは違う戸惑いの顔を見せつつも大きな声で（朝比奈さんにしては、だが）俺に向かって話した。

「キョン君・・・私、キョン君のことが好きなんです！私と付き合ってください！」

・・・はい？

何だ？俺は今何を言われたんだ？付き合ってください？俺が？朝比奈さんと？

暫しの沈黙に耐えられなかったのか、朝比奈さんは顔を真っ赤にして俯いた。

「・・・すつ、すみません・・・。困りますよね、いきなりこんなこと言われても・・・。でも・・・言わずにいと苦しくて・・・。」

いや、その、困るとか困らないとかではなく、俺は純粹に動揺しているんですが・・・

そう思ったが、声に出すのは余りにも残酷なことに思えて、何か喋らねばという思いから口が勝手に動いた。

「あゝ、あの・・・」

「は、はいつ、なんでしようかつ!？」

貴方まで動揺してどうするんですかゝ、告白したのは貴方ですよゝ。

「あの、ありがとうございます。でも俺達、今までSOS団として活動してたっていうか何て言うか・・・」

「・・・そうですね・・・」

「ま、待ってください。俺は貴方が嫌いなんて言っていないですよ。ただ、恋愛の対象として見てなかったといいますか・・・いや、こういう

言い方は失礼ですね。」

俺はこの時決断すべきじゃなかったのかもしれない。でも、俺は自分ではよく考えたつもりで言っただ。

「・・・それでも良かったら、付き合ってみますか？」

「・・・え・・・？」

「お互いのこと、まだ知らないことだらけです。だったら、その間の時間を彼氏彼女として過ごしてみるのも悪くないかなって。」

「そ・・・それじゃあ・・・」

「今から俺の彼女ってことで、良いですか？」

俺は自分でも驚きなくらい自然な微笑みをした。朝比奈さんに。

「・・・っ・・・!!」

突然、朝比奈さんはすすり始めた。そして刹那。

「ふえええええええ!!」

盛大に泣き始めてしまった。・・・えっ、俺、何かまずいことでもした？俺は朝比奈さんを振ったんじゃないって、受け入れたんだよね？ならば何故泣く？Why!?

「・・・ごめんなさい・・・涙・・・止まらないですう・・・」

だから何で!?

「夢みたいです・・・!!・・・嬉しくて・・・!」

嬉し泣き・・・か。朝比奈さんらしいな。そんなに俺のことを思っ
て貰えるなんて、なんて幸せ者なんだ、俺は。

涙が終わった後、俺達は部室に戻った。

その時は、朝比奈さんのことで頭がいっぱいだったせいかな、時間が経つのが異常に速く感じた。

あっという間に長門の本を閉じる音と共に下校時刻となる。

朝比奈さんと帰ろうか、そう思った矢先、ハルヒに声をかけられる。

「ちょっとキョン、来なさい。」

おいおい、いい加減俺の首根っこを掴むの止めてくれ。マジで伸びちまうって。

螺旋階段に連れて来られたが、ハルヒは中々言葉を発しようとしな
い。

・・・帰っていいかな、俺。

「あんた、みくるちゃんと付き合うことになったんだって？」

・・・は？

何でコイツがもう知ってるんだ？まさか、朝比奈さんと俺のやり取りを盗み聞きでもしてやがったのか？

「違うわよ。みくるちゃんがずっとあんたばっか見てたから、問い
ただしただけよ。」

くれぐれも気をつけてくれよ。あのお方は俺みたいに接すると泣き
出すぞ、絶対。

「ま、あたしは人の恋愛に首突っ込むような女じゃないから。せい
ぜい頑張りなさいよ。」

「へいへい、わかってるよ。」

終始落ち着かないような、ムスツとしたような表情でいたハルヒは、今日初めて笑顔を見せた。

「ただし、一個条件。みくるちゃんは大切なSOS団団員なんだから、泣かせるようなことがあったら許さないからねっ！」

「わーってるy・・・？」

ハルヒはその言葉と共に足速く去っていった。

だが、俺は生涯あのハルヒの笑顔をおれんことはないだろ。何故って？決まってるだろ。あんな作り笑顔をみたのは初めてだったからさ。

2 く憂鬱な日曜日

日曜日。

朝比奈さんはどうやら都合があつて遊べないらしい。やれやれ、市内探索パトロールも無いし、絶好のデート

日和だと思つたんだが・・・。

家でごろごろしてようかと思つたのだが、何故か歩きたいと思い、一人で公園をぶらついていた・・・すると。

「ん？」

あれはハルヒじゃないか？アイツがこんなところで一人では・・・

・珍しいな。

「おい、ハルヒ！」

結構なボリュームの声で呼んだつもりだったが、聞こえていないのか？それとも無視したのか？

・・・あいつがSOS団団員の声に無視するはずは無いし・・・うーむ。

ま、考えるより動けだ。

その後、ハルヒを呼んだ俺はいつも通りの反応を示し、ベンチに腰掛けた。

「日曜なのに何やってるのよ。ちゃんとみくるちゃんと居てあげな

きやダメでしょ?」

「バーカ、余計なお世話だ。」

「・・・そうよね、ゴメン・・・。」

「・・・あ?」

・・・何? ハルヒが素直に謝るだと? コイツ、毒キノコでも拾い食
いしたのか? さっきの言動といい、今日のハルヒは珍しいこと
だらけだな。

「・・・ねえ、みくるちゃんとは、上手くやって行けそう?」

「まあ、何とかな。真面目だし優しいし、すぐ赤くなるからちよい
と気を使うけどさ。」

「そうそう、でもそういうところがまた萌えポイントなのよねえ。」

やれやれ、コイツは朝比奈さんを『萌えの化身』かなんかと勘違い
してるんじゃないか? そう思い、唐突に笑ってしまう。

「・・・何よ。」

「ああ、いや、お前って本当に朝比奈さんが大好きだよなって思っ
てな。」

「・・・あ・・・そうでも、ないわよ・・・。」

またハルヒが曇った顔を見せる。どうなってんだ? 今日のハルヒは

喜怒哀楽が激しいってもんじゃねーぞ。

暫く経って、ハルヒは唐突にこんなことを言いやがった。

「・・・ねえ。」

「ん？」

「みくるちゃんと・・・キスした？」

「・・・はあっ!？」

いきなり何を言い出すんだ、こいつは。危うくコーヒー吹くところだったぞ。

「し、してねーよ、んなもん!」

動揺のあまり、齒切れの悪い言葉になってしまった。勘違いするなよ？

「ぷふっ!」

ハルヒは笑みをこぼしながら吹き出しやがった。わ、悪かったな、ヘタレで。

「ダメよ、もっとリードしてあげなきゃ。」

「んなこと言われても・・・俺、女の子と付き合つのは初めてだから・・・。」

いかようにも勘違いしそうな文章である。そこ、ダサイとか言うな。

「ふうん……。」

ハルヒはまた少し考え、更に驚きの言葉を俺に投げかける。
後にも先にもこんな大胆な奴はコイツぐらいなもんだよ。

「……。じゃあ、練習してみる？キスの練習。……。あたしと。」

「……。ああ!？」

いかん、茶化してやがるな、コイツ。顔にそう書いてある。その証拠に、なんだその含み笑いは。裏があるのバレバレだぞ。

ここは落ち着け、落ち着くんだ俺。

「あたしをみくるちゃんだと思ってさ。同じSOS団の仲間だし、あたしは付き合ったこと何回もあるからあんたより先輩だし。」

何かある。絶対何かある。そう思った。

「……。ね？」

この顔を見るまでは。

そのハルヒの顔を見た瞬間、俺の目はコイツの顔に吸い込まれていくような気がした。

自分の意思とは関係なく、ハルヒと俺はお互いの顔を近づけていく。そして、唇と唇が重なるうとして……

「……。はい、ここまで!」

ハルヒは我に返ったように俺の頬に手を当て、俺との距離を離れた。

「練習なんだから、しちゃったらダメじゃない。」

「あ、ああ・・・。」

「それとも、まさか本気だった？」

ハルヒはまたあの笑顔を俺に向けた。ま、そんなところだろうさ。だが、こうやってハルヒに茶化されるだけなのも癪だ。せめてお前の思い通りじゃないくらいの言い訳はしたいもんさ。

「んなわけねーだろ、バーカ。」

そして時は夕暮れ。随分長居したな。

「ま、60点ってとこね。」

「へいへい。」

「じゃあね。」

「おう、また明日な。」

俺はハルヒと別れを告げ、家へ向かった。ハルヒの後姿が、印象的だった。

3 現実へ現実逃避

翌日。

俺はいつも通り学校へ行っただが、ハルヒは居なかった。おいおい、またあんなへんちくりんな世界に飛ばされたつてのは嫌だぜ？

どうやらそんなことはなかったらしい。

クラス全員が、俺とハルヒの机を見ながら何か言っているのだ。
・何だ、鬱陶しいな。

「キョーン。」

谷口が現れた。

しかも、極上のにやつき顔だ。

廊下に出た俺達は、やはりこの話題になる。

「何なんだ、お前まで。」

「隠すなつて。お前・・・」

その話を俺は耳を疑ったね。

「は？俺とハルヒが？」

「もう学校中の噂だぜ。昨日涼宮とキスしてたって。」

・・・まさか、あの公園のことか。
誰かに見られてたのか。やれやれ。

「あー、いや、あれは誤解だ。」

「とぼけんなって。ま、最近変だとは思ってたぜ。何か妙に楽しそうだしな。」

「だからしてないって。大体、俺が付き合ってるのはハルヒじゃない。朝比奈さんだぜ？」

「ああ？お前とあの朝比奈さんが？マジか？」

「・・・そんなに意外かよ。」

ま、お前も朝比奈さんを崇拜していたみたいだが、俺の彼女になつてたってわけだ。残念だったな。

・・・なんて言えるはずもなく。

「だってお前ら、全然タイプ違うじゃねーか。お前のタイプはもっと変な奴だろ？涼宮なら納得できるけどな。」

「勝手に決めんなよ。それにその噂も嘘さ。」

すると、一つだけ気になってくることがあった。

「なあ・・・この噂って朝比奈さんにも・・・」

「まあ、学校に行きや嫌でも耳に入るだろうよ。」

「・・・ちつ。」

それが一番怖い。朝比奈さんに愛想尽かれたなんて知られたら、俺はもう生きていけないだろう。

そんな話をしていると、アイツが登校してきた・・・と思いきやこちらに近づいてくる。

「ああ、いたいた。」

ハルヒだ。ニコニコしながらこちらに歩いてくる。おいおい、その笑顔、若干怖いぞ。

「お、おう、ハルヒ、おはよう・・・」

「ちょっと付き合ってよ。時間は取らせないから。」

そう言っただけの会話を遮り、谷口の耳を掴んで強引に連れて行った。

「ちよっ、俺何もしてないぞっ!？」

「お、おい、ハルヒ、お前・・・」

すでに去っていた。

その後、後を追うように俺は急いだが、途中で朝比奈さんと会う。
・・・だが、生憎朝比奈さんと喋る気力は無かった。
ごめん、朝比奈さん・・・今度またゆっくり話そう。

そうして中庭にたどり着いた俺は、谷口に迫るハルヒを見て何故か焦りを覚え、柱に隠れた。

「なあ・・・正直、信じられんのだが・・・。」

「何だよ。あたしの言ってること、そんなにおかしい？」

「っつーか、今まで全然そんな雰囲気なかったどころか、ジャガイモくらいにしか思ってたただろ、お前。」

「あれか？近すぎて気づかない想いって奴？」

「・・・そうね・・・似たようなものかも・・・。」

そして俺は次の行動に驚愕する。

「ねえ・・・わかりやすい証拠、見せてあげようか？」

そしてハルヒは谷口に顔を近づけ、唇を近づけ・・・！！

「・・・ちよつ、ちよつと待て！！」

谷口はハルヒを制止した。未だ強引に迫ろうとするハルヒの手首を掴み、引き剥がす。

「・・・。」

ハルヒは何も喋らない。・・・顔も見せない。

「やっぱ変だよ、お前。本当に俺が好きなのか？」

「・・・どついう意味よ・・・。」

「間違つてたら謝るがな、涼宮、お前つてキョンが好きなんじゃないのか？」

「・・・！」

何？ハルヒが？俺を？

「な、何言つてんのよ。あたし・・・あたしは・・・。」

もう、俺は止まれなかった。

盗み聞きしている俺が悪い。もう出てかなければならない。そう思い、俺は前に出た。

「・・・キョン。」

谷口はやっぱりわかっていたらしい、俺がいること。だが、ハルヒはそうではなかったようだ。

「・・・あつ！・・・あ・・・。」

灰色の雲が、全てを切り離したかに思えた。

4 く心にあらざる

俺は谷口に連れられて、階段に腰掛けた。
ハルヒはあの後、走って逃げてしまった。

「あいつ、自分とお前の噂を消したくて、俺と付き合おうとしたんだよ。」

噂・・・ああ、あのどうでもいい噂か。

「噂なんか・・・」

「ただの噂なら、こんなことしないんじゃないのか？」

その言葉に俺は返すことができなかった。

そのまた翌日。

睡眠時間もままならず、ああ、遅刻決定だと思いつつ登校すると、そこにはハルヒがいた。

「遅刻よ。」

相変わらずの作り笑顔。こんなハルヒは見たくなかった。
それでも真実を確かめるべく、俺はハルヒと中庭に出た。そう、あいつは一体・・・。

「なあ・・・は」

「あのさあ、谷口が言ったこと、間に受けないでよね。」

ハルヒは俺が好きなんじゃないかとかの、あの話か。ま、信じちゃいねーさ。

「あんとみくるちゃんが仲良さそうなのを見て、あたしも久々に彼氏作ってみようかなあと思って、

誰にしようか迷ってたときに偶然あんと一緒にいた谷口を見つけて、谷口にしようかな、と思ってさ。そしたら・・・」

「・・・お前！！！」

「・・・え？」

ハルヒはキョトンとした目で俺を見つめた。そりゃそうだ、あの撮影の日以来初めてコイツに怒鳴ったんだからな。

だが、俺は何故かこの時怒りが収まらなかった。

谷口にしようかな、だと？お前はそこまで墮落した、適当女だったのか？

「お前・・・そんな簡単な気持ちで男作るのかよ。」

高校入学以前、つまり中学生時代のハルヒだったら、告白されたら全員OKだったらしいから、そんな感じだったのかもしれない。

だが、今のハルヒは違う。常識もある程度できてきて、やっと普通な生活も順調になってきたとこなんだ。

それなのに、コイツはそれを無視しようとした。それが許せなかった。

ハルヒは暫く訳も分かってないような素振りをしたが、やがてジト目になり、ハルヒらしくもないこんなことを言いやがった。

「・・・そっちこそ余計なお世話よ。」

「・・・く!」

「あんたはみくるちゃんのことだけ考えていればいいの。ね?」

「・・・え?」

またしてもあのハルヒの笑顔。おいおい、お前の自慢の100Wの笑顔はどこ行っただよ・・・。

「彼女心配させたら最悪なんだからねっ。じゃあね。」

こっちもこっちで、返す言葉もなかった。

さて、ようやく朝比奈さんとのデートの日ができた。

朝比奈さんに聞くと、遊園地やら映画館やら行くより、俺と少し歩きたいと言う。誰あろう朝比奈さんの頼みだ。

すぐ近くにあったクレープ屋でクレープを二つ買い、朝比奈さんに渡した。

朝比奈さんは笑って貰ってくれた・・・のだが、何故だろう、俺の顔は曇っていた。

それに気がついたのか、朝比奈さんも途端無口になる。どうしよう・・・間がもたない。

すると、朝比奈さんが先に話しかけてきた。

「……………君。」

「……え？」

本当に久しぶりに本名、しかも下の名前で呼ばれた俺は、今までキヨンとしか呼ばれていなかったため、驚いてしまう。

「名前で呼んでみたかったんですけど……嫌でしょうか……？」

「そんなわけじゃないですよ。ただ、今までキヨン、で統一してたので、今更本名で呼ばれて純粹に驚いたんですよ。」

「そ、そうですね。今更ですよ、キヨンくん……」

「ははっ、やっぱりキヨン、の方が呼びやすいんじゃないですか？」

「そうみたいです。」

朝比奈さんに、そして俺にも笑みが戻った。相変わらず朝比奈さんの笑顔は美しいね。

「……良かったら、私のことも”みくる”って呼んでください。」

照れくさそうに頬を染めて朝比奈さんは言う。

えーと、何と云うか、これで退いたら男の俺としちゃダメ人間なわけ。

「あ、はい。……じゃあ、”みくるさん”」

ハルヒみたいにちゃん付けで呼べないし、かと言って呼び捨てにするのはいかん。かなり違和感があるが、これで満足してくれるならこれでもいいさ。

「・・・えへへ・・・。」

くうっー、朝比奈さん、その恥ずかしそうな笑みは犯罪ですっ！

その後、朝比奈さんと俺はブラブラ公園を歩いたり、ショッピングなどを満喫し、夕刻になってバス停まで送りに行った。

「じゃあ、これで。」

「はい。」

「キョン君・・・また、明日。」

「はい、また明日。」

空を見ると、夕立が来そうだった。

5 遅かった太陽

夕立がやってきた。

ぽたぽた、という擬音語はほんの数十秒だけで、その後一気に土砂降りと化した。

「やべーな。一回長門のマンションで雨宿りでもさせてもらうか？」
そうやって走っていると、目の前を見覚えのある猫が通り過ぎた。

「おわっ！・・・ってシャミセン！？」

シャミセンは一瞬俺の顔を確認したかと思うと、坂を登り始めた。
しかも全速力だ。

「お、おい！どうしたんだよ、今日は日曜だから学校は休みだぞ？」
かといってこの大雨の中放っておくわけにもいかない、か。しょうがない、後を追うか。

しばらく坂を上がっていると、本当に小さな広場に出た。
そしてシャミセンも止まる。

そこで目にした人物に、俺は驚きを隠せなかった。

・・・そう、ハルヒである。

何故こんなところにハルヒがいるんだ？しかも土砂降りだってのに傘

一つ差さずに呆然と立ち尽くしている。
とりあえず声をかけてみないことには始まらないな。
恐る恐る近づき、俺は喉から声を出す。

「・・・ハルヒ。」

「・・・ん・・・？」

ハルヒも振り返って俺の姿を見て驚いたのか、啞然としている。

「・・・どうしたんだよ？」

「・・・どうもしてないわよ。あんたこそ、みくるちゃんとデート
じゃなかったの？」

今その話題をするのか。そんなことはどうでもいい、きちんと済ま
せたさ。

「ずぶ濡れじゃねーか。」

「・・・。」

沈黙。

何も喋ろうとしない、動こうとしないハルヒに業を煮やし、俺はハ
ルヒに近づこうとした・・・のだが。

「・・・来ないで・・・。」

弱々しいハルヒの声。その違和感に俺は足を止めた。

「・・・来ないですよ・・・。お願いだから・・・。」

一体どうしたってんだ、雨に打たれすぎて頭おかしくなっちまったか？

「あ、あんたはみくるちゃんのことだけ考えていればいいの。・・・みくるちゃんの彼氏なんだから。」

「・・・今、関係ねーだろ。風邪引くぞ。」

やはり要領を得ないハルヒの受け答え。間違いない、こいつは何か隠している。

さりげなく近づこうとするも・・・。

「・・・ダメなんだったら!!!」

ハルヒの力の無い怒鳴りに再び足を止められた。

「ほっとかなきゃ、ダメなの!!!」

何の話をしてるんだ、こいつは？やはり聞く必要があるんだろうな。

「・・・もう、あたしに構わないで・・・。」

「ハルヒ・・・!」

強引に足を進めたのだが、ハルヒの手が俺との間の空を切り、行く手を阻む。

「やめて!!!!」

ハルヒは足を止めた俺を避けながら歩き去ろうとする。ダメだ、ここでコイツに逃げられるわけにはいかない。

「おい!!!」

ハルヒの手を握った瞬間、ハルヒは思い切りもがいてくる。まあ、そんなことは分かりきったことさ。俺はその抵抗を何とか受身しながら、

ハルヒと小競り合いになり、最終的にハルヒの後ろから俺が抱きしめるような形で抵抗が終わる。少し恥ずかしいが、これでハルヒは逃げられない。

すると、あろうことが、ハルヒはいきなり俺の腕の中で泣き出したのである。

「・・・ひつく・・・優しくしないで・・・。」

がつしり掴んでるから優しくはない気もするが、まあ、抱きしめてるようなもんだから、そんなもんに感じるんだろう。

「・・・あたし馬鹿だからさ・・・優しくされると・・・勘違いしちゃう・・・!」

一気に泣き崩れるハルヒ。おいおい、こんなに泣いてるハルヒってのは、前代未聞だぞ。

ハルヒの方も、ようやく話す気が起きたのか、全ての真相を語ってくれた。

「・・・怖かった・・・。」

・・・告白するのが怖かったの・・・。

・・・あんたに告白してもしフラれちゃったら、もう友達としてすらいられないかもしれない。

付き合えることになったって、今度はみくるちゃんや有希が悲しむことになって普通に接してあげられないかもしれないもの・・・。
だったら諦めた方が良く、その方が傷付かないって思ったのよ！
・・・なのに・・・今は後悔しかしてない・・・。」

ハルヒ・・・お前・・・。

「・・・バカよね。自分が決めたことなのに・・・」

「・・・ハルヒ・・・俺は・・・」

「キヨン。」

泣いているながらもはつきりとした口調で、俺を呼ぶ。

「・・・あたしは涼宮ハルヒ。・・・朝比奈みくるじゃないの・・・。」

その時俺はどんな顔をしていたのだろう。ハルヒは・・・憂鬱顔だった。

「遅かったのよ、もう・・・。」

ハルヒは死んだような目つきで俺を見て、こう言った。

「・・・ばいばい・・・。」

6 選択

月曜日。

俺は、谷口を呼び出した。

何故かはわからない。だが、話を聞いてもらいたい相手が欲しかったのさ。純粹にな。

「ま、難しい問題だな。お前らの団内だしな。」

「・・・谷口、お前なら・・・どうする？」

「俺がお前の状況だったらか？そりゃもちろん、二人ともゲット！（ぐっ！）」

「・・・お前の爪一本一本剥がした後声帯引きずり出してやってもいいか？」

「・・・すみません。冗談です。」

「ふう。ま、正直面倒くせーな。」

「こんなことならいつそ・・・」

「ああ、そうだな。二人とも距離を置こうなんて考えたら、最高のマヌケだよな。」

・・・初めて谷口にまともなことを言われた気がした。だが、今の俺にはそうすることでは、事態を終息させることがで

きないと思っていたんだ。

「・・・キヨンよお。お前、自分が綺麗なままでいたい、そう思っ
てねーか？」

最近の俺は言葉を返すこともできなくなったのか。俺はただただ谷
口の言葉を聞いているばかりだった。

「ここまで来たらよ、お前どのみちどっちかを傷つけることになる
んだぜ？答えを出すのが遅くなるほど、傷が深くなると思うぞ？」

谷口の言うとおりだった。

ハルヒを選べば朝比奈さんが、朝比奈さんを選べばハルヒが、そし
て、どちらも選ばなければ両方が。

いや、もしかしたらあの時のハルヒの言い方からすれば長門はすで
に傷ついているのかもしれない。

俺は・・・最低だった。

「谷口・・・俺は・・・」

「ああ、もう一つだけいいか？」

「・・・ん？」

谷口は真面目な顔を一気に崩し、いつものアホ面に戻って言った。

「おめーの悩みは贅沢すぎるんだよおおお！！！！」

そして別れ際、一発肩を殴ってきた。俺はどんな顔をしていたのか
わからない。だが、決心は付きかけていた。

・・・贅沢、ね。確かにそうだ。

落ち着きたくて部室へ向かうと、そこには長門がいた。

「よう。」

できるだけ普段通りに接しようと思った。声色、大丈夫だよな？

「私は・・・」

長門が自分から喋ろうとしてきた。珍しい、聞いてやることにする。

「私は・・・貴方が好きだった。一般的な有機生命体の持つ友情的概念ではなく、有機生命体全般が経験する恋愛という概念だった。」

おいおい、ようやく決心しかけてたのに、ここでまさかの告白か？

「正確な時間座標はわからない。だが、私という固体の持つ好きという感情は、日に日に増していった。」

長門さん？早くも話に付いていけなさそうなんですが・・・

「だが、私はこの恋愛的感情よりも、更に重要視するものがあつた。それが・・・涼宮ハルヒ。」

・・・長門、まさかの百合疑惑爆弾発言か？

「私は彼女とその周辺に存在している有機生命体との生活が”好き

” になった。そして、涼宮ハルヒは私にこう言った。『貴方は親友だ』と。」

ハルヒが？長門を親友だと言っただと？

「無論、朝比奈みくると涼宮ハルヒもその関係にあると思われる。そして私自身と朝比奈みくるも・・・そうでありたいと思っている。」

なるほどな。SOS団女子団員の友情か。

「その『親友』だからこそ貴方に問う。今の貴方の関係は、貴方の・・・本当の心？」

呆然とした。

確かに朝比奈さんと付き合い始めたのは朝比奈さんの告白が原因で、結果的に俺はそれで良いと承諾した。

だが、それは果たして俺の本心なのか？俺の脳内会議で全一致したものだっただけか？

そして俺はハッとしたね。

俺には前から、ある感情があつたことにな。

「私は選択を貴方に委ねた。涼宮ハルヒと朝比奈みくるに”私”を託した。次は・・・貴方の番。」

ああ、そうだな。

今度は・・・俺が決断する番だ。

「長門。」

「・・・何？」

「・・・ありがとう。」

「・・・そう。」

部室を出る頃には、俺の意識は完全に落ち着いていた。そして俺は別れ際の長門の言葉は、ずっと印象に残るだろう。

「・・・頑張つて。」

そしてまた日が流れた。

俺は、朝比奈さんを放課後の誰もいない教室に呼び出した。

どんよりした雲間が、今から朝比奈さんにする話の残酷さを描写しているように感じられる。

だが、俺も今更引き下がることはできない。そう思い、朝比奈さんの待つ教室に入った。

「キョン君。・・・お話ってなんでしょうか？」

単刀直入に聞いてきた。・・・朝比奈さんが、自分が怖い。朝比奈さんにとって残酷極まりない言葉を発して良いものか、自分自身が恐れを抱いていた。

「・・・二人つきりですね・・・。」

俺は気づいた。

朝比奈さんもわかってている。俺がこれから何を言うのか知っている。だからこそ、話を逸らしたいのだ。

「漫画なんかだと、放課後の教室で二人きりなら・・・キスとか禁則事項とか・・・しますよね。」

貴方の禁則事項はやっぱり放送禁止用語だったんですかつ！

・・・いかんいかん、乗せられてはダメだ。俺は決心したのだ。ならば伝えなければならぬ。

「・・・朝比奈さん。」

「・・・どうして苗字で呼ぶんですか？」

「・・・くっ・・・！」

その言葉だけで、どれだけ重みがあるだろうか。俺には、量りきれない程の気持ちがあったと思う。押しつぶされそうだ。

「・・・私、ずっと思っていたんです。・・・涼宮さんに負けたくない・・・と。」

「・・・え？」

「私・・・ずっと前から知っていました。涼宮さんがいつも誰を見ていたのか。わかってたのに・・・涼宮さんに相談しました。」

「・・・。」

「キョン君に告白するって。もっと仲良くなりたいからって。・・・涼宮さんは最初びっくりしてたんですけど・・・すぐに笑ってくれました。」

”任せなさい”と。・・・そう言ってくれるってわかっていて・・・自分が卑怯だとわかっていて・・・それでも・・・それでもキョン君の傍にいたかったんです。」

朝比奈さんから明かされる真実。

傍から見れば、それは残忍極まりないかもしれない。だが、それだけ彼女の想いは強いのだ。誰にも責める資格なんてない。

「・・・私じゃ、涼宮さんの代わりにはなれませんか！？もつと・・・涼宮さんみたいに積極的になりますから・・・もつと・・・自分自身を強くして、料理も勉強して、キョン君の望むような女の子になりますから・・・！」

「・・・違う！」

「・・・ほえ・・・」

そう。違う。俺は朝比奈さんは朝比奈さんのままで居て欲しい。それはハルヒにも、長門にも言えることだ。

朝比奈さんがどう変わっても、朝比奈さんは朝比奈さん。俺の大好きな、SOS団団員の一人なんだ。

「・・・違うんです。・・・そんなこととして欲しいんじゃない・・・」

「・・・キョン君の傍に・・・居たいんです・・・」

次第に眼に涙を溜めていく朝比奈さん。全く同じ場所で流した涙なのに、今度のは・・・悲しくて、悔しい涙。

自分はもうこの人の傍に居ることが叶わない、そんな涙。

「・・・俺は・・・」

言わねばならない。真実を。例えどれだけ朝比奈さんが傷ついてしまっても、自分に嘘をつくことで不幸にさせたくない。だが、それはできなかった。

朝比奈さんは涙を溜め込んだまま俺に駆け寄り、頬に冷たく水気の

あるものを当てる。

・・・最初で最後のキスだった。

「・・・クソッ!!!」

自分のヘタレ具合、そして何より彼女に自分の本当の気持ちを素直に伝えることに躊躇してしまった自分に無性に腹が立った。

自分の一番近くにあった机を蹴っ飛ばし、その場に立ち尽くす。

悔しい。こんなことはあつてはならない。悔しすぎる・・・。

次の日、ハルヒも朝比奈さんも学校を休んでいた。

これじゃ想いを伝えることすらできない。あの時にきちんと伝えておけば・・・そんな後悔だけが自分に残る。

授業中も、教師の話なんて1ピコグラムも入ってこなかった。

放課後。掃除当番が俺を見ながら『どうしたんだろうか？何かトラブルでもあったのか？』としきりに噂していたみたいだが、そんなことはどうでも良かった。

俺はなんの根拠も無く思った。

『このまま待っていたら、朝比奈さんは来るんじゃないだろうか？』

そして、無人の放課後にポツリと、一人自分の机に座って待っていた。

どのくらい時間が経ったのだろうか。夕暮れ時である。

赤茶のロングヘア、その髪と同色の女子生徒が俺の傍に無言で立

っていた。

・・・朝比奈さんだった。

8 く向き合う心く

顔は俯いているためよく見えない。だが、その髪だけでわかる。朝比奈さんだ。

俺は、朝比奈さんが無言で立っているからこそ、自分の喉奥から懸命に声を引つ張り出した。

「・・・貴方と付き合っている間、本当に楽しかった。誰かに必要とされることがあんなに楽しいことなんて、初めて知りました。

貴方とならば、上手くやっていけると思いました。・・・このまま。

」

そう、それは本当だ。朝比奈さんとならば上手くやっていける。それは、誰もが思うこと。朝比奈さんほどの女性なんか、この世にあんまりいないだろう。

「・・・でも、ダメなんです。」

俺も立ち上がり、決心をつける。大事なところで声が裏返ったりするなよ、俺？

「・・・俺、最低なことしてました。朝比奈さんと居ながら、違う奴のことを見てました。・・・そのことに気づいてからも、結果的には黙っていました。

・・・貴方の優しさに甘えて・・・。」

そうだ。朝比奈さんとデートをしている時も、心ここにあらず状態だった。・・・俺は最低だった。

「俺……！……俺が好きなのは……」

勇気を持て、俺。もう、逃げるなよ？

「……涼宮ハルヒなんです……すみません……。」

すると、空気が変わったような気がした。

「キヨン……」

「……え？」

聞き覚えのある声だ。……だが、朝比奈さんじゃ、無い……？
その人物は俺に近づくと、俺の腕を掴み……泣いていた。

「……ハルヒ……！？」

髪型は朝比奈さんそのものだ。だが、顔はハルヒ。……どうなってるんだ？

「お前どうして……いや、その髪は……！？」

ハルヒは顔を大粒の涙でグシャグシャにしながら、髪を抜く動作をした。すると、朝比奈さんの髪型はそのままごっそり取れ、いつものハルヒの髪が現れる。

……エクステだったのか……？

ハルヒは泣き笑いして言った。

「……怒られちゃった……。」

「・・・え？」

「・・・みくるちゃんが言ったの、『逃げるな』って・・・！」

朝比奈さんが・・・？

「・・・あたし・・・ずっとこのままで良かった・・・！みくるちゃんや有希を傷つけてまであんたを選ぶような、そんな汚いことはしたくなかったから・・・！」

「・・・だけどあの子が言うの、『それは無理ですよ』って・・・！『もう遅いですよ』って・・・！『本気でキヨンが好きなら、もう逃げちゃダメだ』って・・・！」

『私達、どのみち傷つくしかないんですから』『同じ人を好きになっちゃったんですから』って・・・！有希にも同じことを言われたの・・・！」

「・・・みくるちゃんも有希も・・・今頃きつと泣いてる・・・！」

「・・・。」

やはり朝比奈さんはわかっていて。

俺が誰を好きなのかも、自分が負けたということも。全部知っていて、ハルヒに話したんだ。長門も、ハルヒに全てを託したのだ。自分の可能性を全て捨てて。

「・・・本当に・・・遅かったのよね、あたし達・・・。気付くのも・・・ごまかすのも・・・向き合うのも・・・。」

ああ、そうだな。

俺はハルヒが好きだという気持ちから逃げていたのかもしれない。

そんなことは事実には反するというレッテルを貼り付けて、勝手に納得してただけだ。

そして、今回のことを招いてしまった。・・・遅すぎだよな、全くやれやれだ。

「・・・でも、もう傷つくのはこれで最後にするの。みくるちゃんも、有希も、あたしも・・・キョンも。」

「・・・ああ。」

そして、俺とハルヒは向き合う。やり直しを宣言するために。多分、朝比奈さんがしたように、ハルヒが話を振ってくるんだろう。そういうところは、負けず嫌いのハルヒらしいからな。

「・・・好きです・・・キョン。・・・ずっと・・・ずっと・・・好きでした・・・!!」

後日談になる。

俺は朝比奈さんに再度謝罪の言葉を直接言った。朝比奈さんには謝っても謝りきれないからな。でも返事はこうだった。

「謝らないで下さい。謝られてそれを許してしまうと、全部嘘みたいに思えちゃいます。私・・・あの時間を大切な思い出にしたいんです。楽しかったこと・・・辛かったこと。」

全部です。・・・だから、謝らないで下さい。」

「・・・わかりました。・・・ありがとうございました・・・!」

そして放課後。

ハルヒと俺は、現在下駄箱にいる。これから二人で下校つてとこだ。

「ああ、そついや今度の日曜どうすんだ？何か遊びに行くつて言つてなかつたつかけか？」

「・・・あつ！ごめん、それキャンセル。」

「え？」

「久しぶりにね、みくるちゃんと有希が、買い物に行きたいつて。だーから、それ無理」

なるほどな。ハルヒと朝比奈さんたちの間柄も、仲直りしたつてわけか。

やれやれ、長い道のりだつたな。

俺も人のこと言える立場じゃないが。

「それじゃ、仕方ねーな。」

「そ。仕方ないの!」

ハルヒは笑顔を見せた。そう、SOS団専用スマイル。100Wの笑顔だ。

帰り道。

「最近暑いわねえ。」

「そうだな。もう夏休みなんだから、納得できないでもないが、最高気温37度つてのは異常だよな。」

「・・・ねえ、本当にあたしで良かったの？」

「・・・は？」

「やつぱり・・・みくるちゃんと一緒に居た方が居心地良かったって思っただけ？」

いきなり何を言い出すんだ、コイツは。
全く、ずっとこんな会話が暫く続くてのか？
やれやれ、俺も相当な苦勞人だろうよ。

「あのなあ・・・いくらなんでもそりゃ怒るぞ？」

「うん、怒って・・・そしたら、ちょっと安心できるから・・・。」

「やれやれ、それ随分屈折してるぞ。面倒くさいと思ったらありやしない。」

「・・・じゃあ、もっとわかりやすくストレートに！」

ハルヒは俺の肩に手を置き、つま先を伸ばして顔を近づけ、唇と唇が重なる・・・って何堂々と帰り道でやってんだ！？

俺は急いで辺りを見回した。その速度は、トムソングゼルをも超越するだろう。

「・・・お、おい！お前なあ・・・」

「・・・へへっ・・・」

恥ずかしそうに笑みをこぼすハルヒ。しょうがない、今回だけだぞ。ハルヒは唐突に俺の腕に自分の腕を絡ませ、顔を寄せる。

おいおい、傍からみりゃただのバカップルだぞ、俺達・・・まあ何と言うか、右から少しいい匂いが・・・って何考えてんだ俺！しっかりしろ俺！

「キヨン・・・好きだからね？」

今更のような確認の言葉。だが、それは紛れも無い本心。だからこそ、俺はあえて笑うだけで何も言わない。

・・・え？ズルいだとか？知ったことか、好きなだけ羨ましがりたい。

「夏ね・・・。」

「ああ・・・。」

そう、俺達の夏は始まったばかりだ。

}
F
i
n
}

8 向き合う心（後書き）

お疲れ様でした（＾　＾）

やはりアニメを参考にしていたということで、かなり今回は書きやすい小説になりました。

これを機に、人生というものを改めて見てみたりしていただけたらなあ、と思うばかりですww

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8305m/>

HRUNNAD ~ もう一つの世界 ハルヒ編 ~

2010年10月9日21時48分発行